用する詩句は、現在では「魯詩」の遺説として資料的にも貴重なものである。これに対して、現存する『詩経』は漢初、魯人毛亨・毛萇が伝え、後漢に入ってから盛んになった毛詩学派のテキストで、これを「毛詩」と呼ぶ。従って、たとえば「蔡人之妻」(三七頁)の例に見るように、同一の詩についてその伝承や解釈が、「魯詩」と「毛詩」とでは全く異なる場合も存するのである。

断章取義　また、『列女伝』に引用されている詩句は、そのもとの一篇の詩自体の内容とは全く無関係に引かれることが多い。詩の数句を一篇から切り離し、全体の意味に関係なく、『列女伝』の物語に適う都合のよい解釈をする。これを断章取義といい、漢代の著作に多く見られる引用のしかたである。

頌と絵図　各伝の掉尾に付す「頌」は、その女性の人柄や事績をほめたたえ、四言八句の韻文にまとめた賛え歌である(ただし嬖伝は戯り歌とでも言うべきか)。作者は劉向ではなく、子の劉歆であるとする説もあるが、詳かでない。また、『漢書』芸文志の班固の自注に、「列女伝頌図」の語があり、頌のほかに絵図が存在したらしい。そして、王回の「古列女伝序」に、「伝は太史公の記の如く、頌は詩の四言の如く、図は屏風を為す」といい、つまり、『列女伝』の本伝は司馬遷の『史記』に倣い、頌は『詩経』の四言詩に則り、絵図は屏風に描いて鑑戒としたと言う。この絵図は早くに亡びさって伝わらない。当時は画家の地位は非常に低いものだったので、作者の姓名も分らない。本書の挿絵は明代の宮廷画家、仇英(号は十洲、一五二〇―四〇年ころ活躍)の描いたものである。